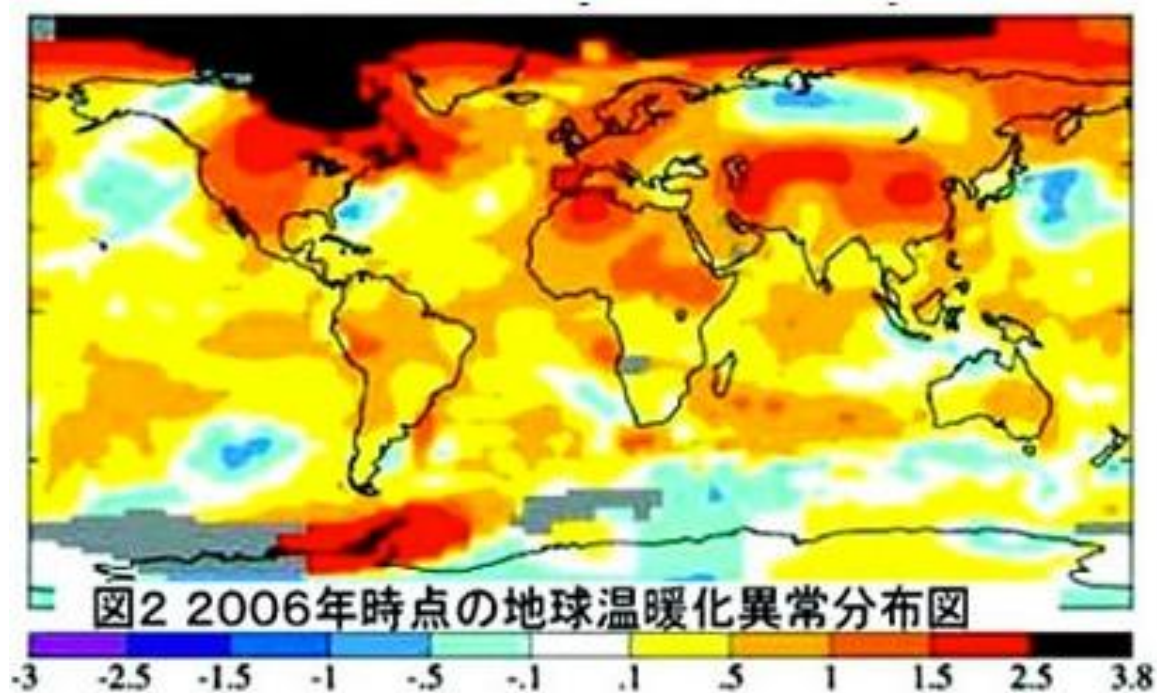


映画「パンドラの約束」が4月に各地で公開上映されるに先立ち、東劇で試写会があり見る機会がありました。監督ロバート・ストーンは長年原子力反対派として知られてきましたが、地球環境が急速に悪化する中、この20年間自然エネルギーは救い主にならず、「貧困から逃れ、地球温暖化を避ける唯一の道は原子力エネルギーかも」との視点から、原子力に異を唱えてきた環境保護主義者が主張を180度転換させた人々の声を紹介し映画にしています。

この映画の前半は反原発運動を追いかけていますが、世界は貧困のため電気が使えない人々が人口の4分の1おり、その人々は上下水道も使えず非衛生で短命であること、世界の人口も増え2050年にはエネルギー消費が2倍になり今世紀末には3～4倍になること、石炭消費が急速に増え、化石燃料汚染のため年間の死者が300万人に上ること、地球温暖化（下図を参照ください）が急速に進み、超大型ハリケーンなど異常気象が顕著になっていることなどから、



「課題を解決するクリーンエネルギーは原子力」との見方に転じた経緯を紹介しています。

チェルノブイリ事故や福島事故も現地調査し、チェルノブイリでは死者が消防にあたった人達も含め百人レベルと言い、「1年後に立ち入り禁止区域に帰還した住民達にガン発生の事実はない」と証言する現地ロシア(ウクライナ?)正教会神父も登場します。

昨年米国でこの映画が上映されると、観客の75%が原子力反対者だったのが、映画終了後は、その8割が原子力支持に変わったとのこと。果たして日本での反応はどうでしょうか。

この映画は米国人の視点で作られており、このような映画が日本人の手で作られるとよいのですが。最後にロバート・ストーンメッセージを紹介します。

『日本各地の原子炉は、千年に一度という最強レベルの地震の中でも特段問題ありませんでした。福島の発電所だけが唯一、津波によって破壊された後に惨事に見舞われました。』

WHO(世界保健機関)と UNSCEAR(原子放射線の影響に関する国連科学委員会)は原爆が投下された広島と長崎で生き残った人々の健康状態を、およそ 70 年に亘り調査し、福島での放射性物質放出による被曝によって健康上の悪影響を受けた人はおらず、また今後についても、何らかの健康被害が認められることは非常に考えにくいと結論づけました。

反核グループは、当然これらの見識に異議を唱えるでしょう。なぜなら、彼らがこれまで作り上げてきた「核関連の事故がもし起これば、この世の終わりのような大惨事になる」という説を否定することになるからです。

この主張こそ、彼らが原子力エネルギーに反対する所以であり、彼らは決してその主張と矛盾する科学的な証拠を受け入れません。彼らは、その政治目的を達成するため、民衆が原子力エネルギーを恐れるように仕向ける必要があります。

日本国民の多くは、ほんの少しであっても放射線量が上がることを恐れており、それは彼らの思うつぼです。私は、避難指示区域のすぐ外にある街を訪れました。そこの親たちは子供たちが屋外で遊ぶことを許しませんでした。放射線量は、世界の多くの地域の元々の放射線量より低い数値でした。しかし親たちは、反核の人々やメディアから得た情報で子供たちの健康を慮り、放射線を恐れていました。

苦しんでいるのは誰でしょうか？二度と外で遊べないかわいそうな子供達や、(多くの場合、必要以上に)ふるさとに戻ることを恐れている家族達です。

メディアは、恐怖心を煽ることで人々の注目を集め、視聴率をたたき出し繁盛しています。「実はそれほど危険でない」と伝えることはニュースにならないのです。悲しいことに、日本の原子力発電の所管当局は国民の信頼を失っており、人々が最悪の事態を信じる傾向にあることが見て取れます。』

「今はパンドラの箱を開けてしまったように、エネルギー問題に様々な考えが飛び交っているが、その箱の底には《希望》が入っていることを忘れてはいけない」というのが映画タイトルのメッセージです。

以上 (2013年2月8日記)